

令和三年夏号

# 日本刀

現存の優品

92



# 現存の優品 ⑨2 目次

|      |                           |    |
|------|---------------------------|----|
| 脇差   | 備前長船盛景(額銘)(南北朝中期・備前)      | 4  |
| 脇差   | 備前長船盛光                    | 3  |
| 脇差   | 応永卅一年八月日(室町初期・備前)         | 4  |
| 脇差   | 備前国吉井助則(折返し銘)(室町初期・備前)    | 5  |
| 短刀   | 宇多国宗(室町中期・越中)             | 7  |
| 短刀   | 義助(室町後期・駿河)               | 8  |
| 脇差   | 伊予掾源宗次(江戸初期・肥前)           | 9  |
| 脇差   | 越後守藤原国儒(江戸初期・京都)          | 11 |
| 三処物  | 堀江興成 行年六十六才(江戸後期・七草図)     | 12 |
| 大小縁頭 | 寿岳斎政美(江戸後期・春草図)           | 13 |
| 目貫   | 利政(金短冊銘)(幕末・秋草図)          | 13 |
| 目貫   | 尾張(室町後期) 井桁透し図            | 14 |
| 縁頭   | 利春(江戸中期) 月下芦雁図            | 14 |
| 縁頭   | 勘四郎(江戸前期) 波濤山道図           | 15 |
| 目貫   | 葛飾住丙午如月吉日                 | 15 |
| 目貫   | 真柳叟守平(昭和41年) 茨木童子図        | 15 |
| 目貫   | 無銘 通乗(光美折紙極め) 江戸中期 弘子図    | 16 |
| 目貫   | 文斎 黒羽勝随(江戸後期) 源平合戦図       | 16 |
| 目貫   | 無銘 京金工(江戸後期) 獅子図 金無垢地     | 17 |
| 目貫   | 無銘 京金工(江戸後期) 這龍図          | 17 |
| 小柄   | 無銘 京金工(江戸後期) 這龍図          | 17 |
| 脇差   | 肥前国住人忠吉作(江戸初期・肥前)         | 18 |
| 脇差   | 於南紀文珠金助重国造之(江戸前期・紀伊)      | 19 |
| 脇差   | 日置光平造(江戸前期・江戸)            | 20 |
| 脇差   | 肥前国住人広則(江戸初期・肥前)          | 22 |
| 脇差   | 水戸住直江平助政                  | 23 |
| 脇差   | 文化五年二月日(江戸後期・水戸)          | 24 |
| 脇差   | 水府住関内徳宗於日旗山下作             | 24 |
| 脇差   | 安政四年三月日(幕末・水戸)            | 24 |
| 脇差   | 依正興好 水府住徳勝作之              | 25 |
| 脇差   | 慶応三年二月日(幕末・水戸)            | 25 |
| 短刀   | 国一模之 平成十五年八月二日/村正(現代・兵庫県) | 27 |
| 短刀   | 無銘 草刈派(江戸後期) 雲龍図          | 28 |
| 短刀   | 無銘 京透し(室町後期) 四方破れ扇透し図     | 28 |

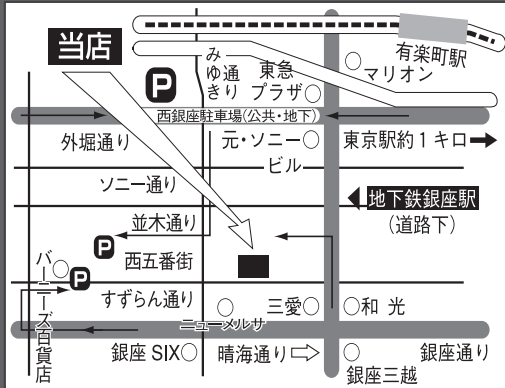
●価格は説明文の末尾にあります

表紙題字：「日本刀」 東大寺長老 故・清水公照師筆  
表紙：月三〈印〉青砥藤綱図

## 銀座・刀剣柴田 夏即売会

令和3年7月3日(土)～5日(月)

●当店への交通は  
地下鉄銀座駅から徒歩1分、  
JR有楽町駅から徒歩8分。  
東京駅からでもタクシー5分、  
基本料金で来ます。



【会期中の営業時間】  
朝10時～夜6時  
(4日の日曜も営業)

＊お車では、上記3カ所の駐車場が便利です

〒104-0061 東京都中央区銀座5-6-8 ☎03(3573)2801  
ホームページ：http://www.tokenshibata.co.jp FAX 03(3573)2804

## ご送金のご案内

- ①三井住友銀行／銀座支店 普通預金 7038644 (株)刀剣柴田  
(送金手数料、お引きください)
- ②郵便局／振替口座 00190-7-52891 刀剣柴田  
(必要でしたら振替用紙、ご請求ください)

とうけんしばた

## ご挨拶

コロナですが、皆さまお変わりないでしょうか。  
本品をお届けする時点で、コロナの状況がどうなっているかわかりませんが、  
今でも銀座は、昼間は若い人が一杯歩いています。ファストファッションのユニクロやGU(ジーユー)などには続々と人が入っています。気候がよいですからねえ。  
などお休み処も、順番待ちの列ができています。外況を受け、少しこち  
年に二回発行の『現存の優品』をお届けいたします。外況を受け、少しこち  
まりの内容となりました。品物は、休業要請をうける業種でもありませんの  
で、店を開けて飾ります。ご覧になりたい品々がいまいたら、どうぞおい  
でくださいませ。

お電話での問い合わせもご遠慮なく、なにとぞご連絡くださいませ。

令和三年夏 柴田光隆

脇差〈額銘〉備州長船盛景<sup>もりかけ</sup>

(貞治―備前)

南北朝中期 約六六〇年前

長卷直し造り 刃長一尺五寸五分(47cm弱) 反り三分二厘 元巾八分六厘 先巾七分六厘 重ね二分四厘



横手の線はあるが大磨上げの長卷直しの脇差で、仕立て直された中心の中央に額銘を嵌める。身巾はやや細めで、反り浅く切先が大きく延び、鎬高くスルドさのある姿である。地鉄、板目で流れも交え、地沸こまかくついて映りが盛んに、まさに繁多に立つ。刃文、小沸づいた互ノ目と片落ち互ノ目を連ねて表は特に高く、刃中に小足入り、葉が飛ぶ。帽

子、浅く乱れ込み先き焼詰める。

額銘で備州長船盛景としつかりと銘の残る脇差である。大宮派の類で南北朝期に一族備前で活躍し、盛景はその代表工。作域は広く、のたれを主調とするもの、丁子や互ノ目の交じる変化のある乱れ刃、角互ノ目の出来、青江風の直刃など多彩で、当時一般的な備前の作風とはちよつと違って激しい作風が特色である。本作は盛景に一番見かける刃文に、姿は切先が大きく延び、往時は豪壮な長巻姿であったことが想像され、南北朝盛期の時代色がよく反映されている。また映りの激しさは特筆もの。

金着二重鍔 白鞘

特別保存刀剣鑑定書付

九十五万円



全身を除いて原寸



脇差

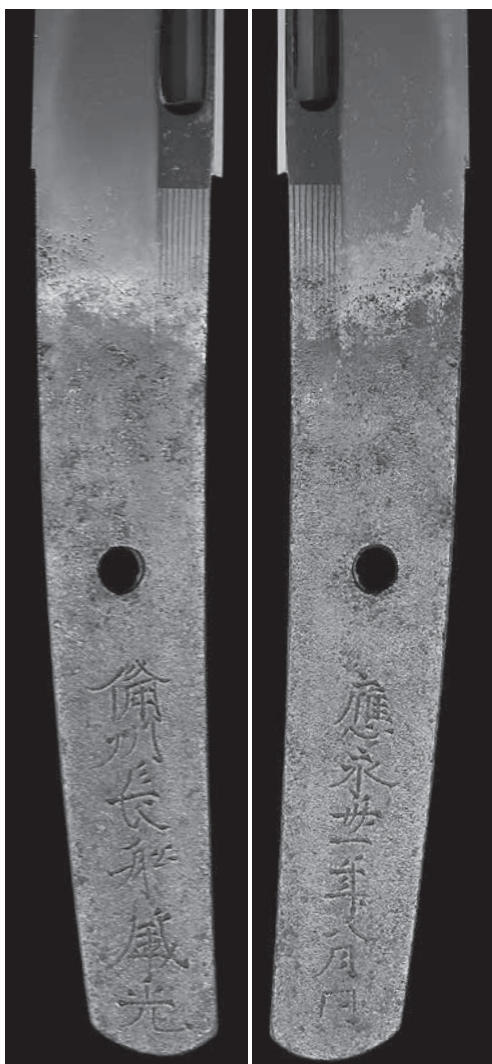
備州長船盛光<sup>もりみつ</sup>

応永卅一年八月日

(室町初期—備前)

五九七年前

鑄造り 刃長一尺六寸六分強(50・5cm) 反り四分  
元巾八分九厘 先巾六分一厘 重ね二分一厘  
スラリとした姿で、先反り気味に頃合いに反り、  
重ねやや厚く、表裏に棒樋を掻いて品よくきれい。



地鉄、板目鍊れ、肌目がきれいに現れて奎目がよく交じり、沸がこまかにつき、映りが刃上に淡く広がった。刃文、匂い出来の腰開きの互ノ目に丁子交じり、やや小模様匂い口締まりところで品がよい。帽子、乱れこみ先き尖って返る。

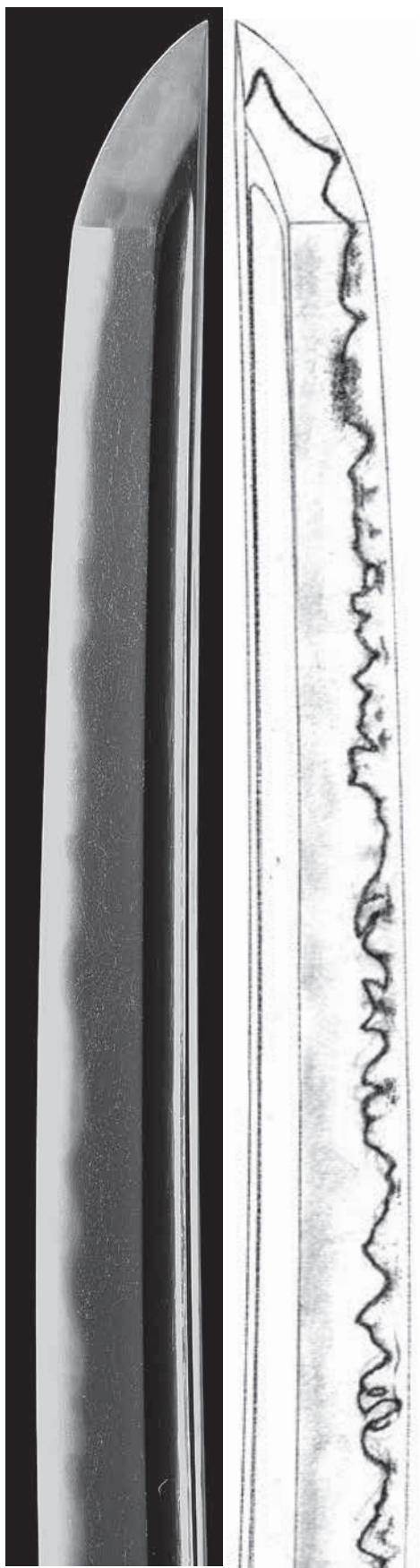
応永備前を代表する盛光の脇差である。本作は盛光の刃文としては穏やかめのものであるが、地鉄がよく、映りがよく現れて出来がよい。享保五年の十三代本阿弥光忠の折紙が添えられており、黒呂鞘に龍金具で揃えた拵も豪華でよく、<sup>はき</sup>金無垢で、昔から大事に伝えられてきたものと思われる。

金無垢一重鍔 拵付(白鞘もあり)

特別保存刀剣鑑定書付

本阿弥光忠折紙付き

二四〇万円



全身を除いて原寸



黒呂塗鞘脇差拵 〈縁頭〉波に飛龍図 赤銅七々子地 高彫 金色絵 〈目貫〉這龍図 金地 容彫〈鑢〉雲に雨龍図 鉄磨地  
隅入り角木瓜形 金布目象嵌 土手耳 〈小柄〉這龍図 赤銅七々子地 金紋 裏・哺金 〈柄〉白鯨着濃緑蛇腹糸巻(拵の総長 七二cm)



脇差 〈折返し銘〉備前国吉井助則 すけのり

(応永—備前)

室町初期 約六〇〇年前

鎬造り 刃長一尺七寸七分半(53・8cm) 反り五分  
元巾八分七厘 先巾七分 重ね二分強

元来刀の長さであったものを磨上げて銘を折返し  
て残し、片手打ちの寸法に仕立て直している。元先

の巾差少なく、重ね頃合いで反り深くつき中切先、  
表裏に棒樋を掻き通す。地鉄、板目に流れこころが  
交じり、強めに肌立つ。刃文、丸い互ノ目主体に小  
互ノ目や矢り風を交え、小沸つき、砂流しわずかに

● 次頁に続く

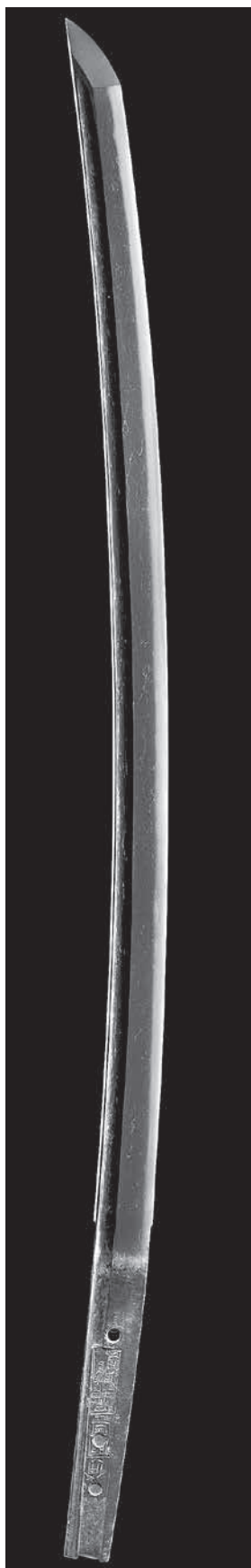


●前頁から続く

かかり小足入る。帽子、乱れ込み尖りごろに小丸。長船に隣接する吉井で、南北朝期から室町期にかけて作刀した刀工を吉井派と称している。特色のある作柄で、小沸出来の揃った小互ノ目を連れて焼いている。作品のほとんどは応永以降のもので、応永

の吉則や今回の助則、永享の清則・永則らがよく知られている。本作は短くされているのは残念であるが、中心は折返されて立派な銘が残り、なかなか印象的である。作は吉井そのものの出来で、拵は波濤図金具の時代のある半太刀拵がついている。

金着二重鑑 拵付（白鞘もあり）  
特別保存刀剣鑑定書付  
佐藤寒山博士鞘書あり  
七十五万円



# 黒石目塗雨龍図影時絵鞘波濤図金具半太刀拵

（総金具Ⅱ縁頭・鯉口・栗形・柏葉・小尻）波濤図 四分一磨地 鋤出・鋤下彫（目貫）龍図 赤銅地 容彫 金色絵（鐔）波濤に二階菱透し図 赤銅波地  
長丸形 鋤出彫 四分一覆輪（小柄）お多福図 赤銅七々子地 高彫 金色絵 裏・哺金（擦れ多し）（柄）白鯨着黒革巻（拵の総長 八一cm

全身を除いて原寸





# 短刀

宇多国宗<sup>くにもね</sup>

(文明―越中)

室町中期 約五四〇年前

平造り 刃長六寸五分 (19・8 cm) 反りなし 元巾

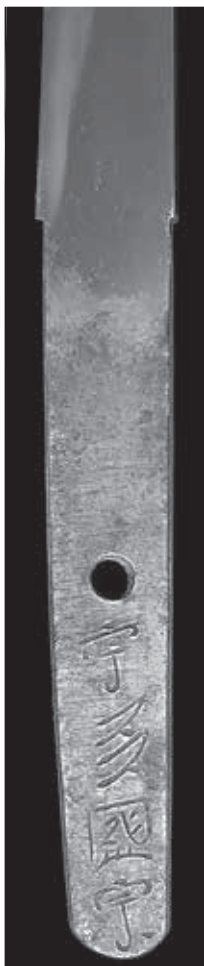
六分三厘 先巾四分四厘 重ね二分三厘

小ぶりで先きわずかに内反りとなり、重ねは厚く、鍛通しと呼ばれる短刀で、棟は真の棟に造っている。地鉄、黒ずんだ板目が流れて肌立ち、表は特に疵がかり、地沸が肌からんで厚くつき輝く筋状の沸となり、地景入る。刃文、浅いのたれに互ノ目を交え、沸強くついてさかんにほつれ、砂流しかかる。帽子、

のたれ込み、しきりに掃きかけ、棟焼に繋がる。宇多派は鎌倉末期の文保ごろに、大和国宇陀郡から古入道国光が越中に移住してきて開祖となり、以後室町時代にわたって繁栄している。国宗は古入道の子と伝え、国房と並んで宇多派を代表する刀工で、同銘は南北朝から室町末期に及ぶ。ただ見かけるのは室町中期文明ころの国宗がほとんどで、本作もその一振で、銘振りよく、地刃の出来に時代性と宇多派の特色が十分に表れている。幕末の古溪拵と呼ばれる合口拵が添えられており、朱潤み塗に柄の立鼓のとり方は上手で、内外味わい深い短刀である。

金着二重鑑 拵付(白鞘もあり)

特別保存刀剣鑑定書付 六十五万円



朱潤み塗鞘合口拵(古溪拵)

〔目貫〕菊桐紋図 銀地 桐紋に金鍍金

(ネジ込み式目釘兼用)〔筭〕亀図 鉄磨

地 銀据文 〔角所〕黒漆塗研出し 〔柄〕

朱漆懸け琴糸巻(拵の総長 三二・五 cm)

# 短刀

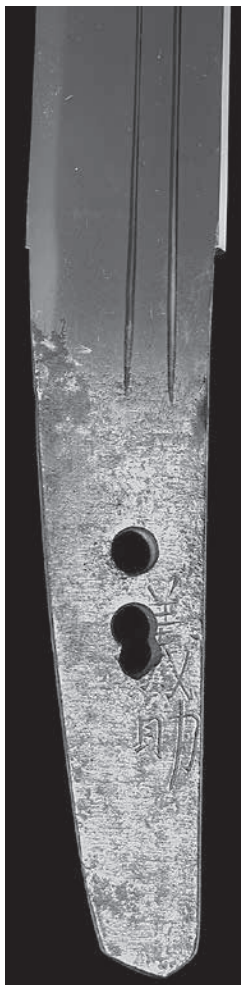
よしすけ  
義助  
ぎすけ

(永正—駿河)

室町後期 約五〇〇年前

平造り 刃長九寸一分 (27・6 cm) 先内反り 元巾  
九分 先巾六分六厘 重ね二分一厘

身巾広めの大ぶりの短刀で、重ね厚めで三つ棟となり、先き内反りのキリつとした姿。表に素剣、裏に護摩箸を彫る。地鉄、板目で刃寄り・棟寄りに流れ交り、肌立ち、地沸ついて地景入る。刃文、直ぐ調が浅くのたれ、匂い深く小沸よくつき、砂流し・金筋かかって明るく冴える。帽子、直ぐに小丸、返り長く焼き下げる。



駿河国には室町中期から新刀期にかけ、島田派という刀工群が大井川の島田の宿で活躍した。その代表が義助で、古刀期の室町期だけでも四代あるとされている。島田物は実用刀が多く、土地柄、徳川・今川・武田の豪族らに刀を納め、ことに武田氏を作刀の販売対象として栄えた。今回の義助は永正末年ごろの作と思われ、相州伝の作域で、『駿遠豆三州刀工の研究』には「おそらく相州上工たといえば行光を狙った作と思われ、ある程度成功している。義助の傑作である」とある。拵も葵紋金具の品よい合口拵が添えられており、柄を黒の出し鮫とし立鼓をとって中ほどキュッと狭まって姿よい。

金着一重鰭 拵付(白鞘もあり)

重要刀剣(昭和46年・第20回)

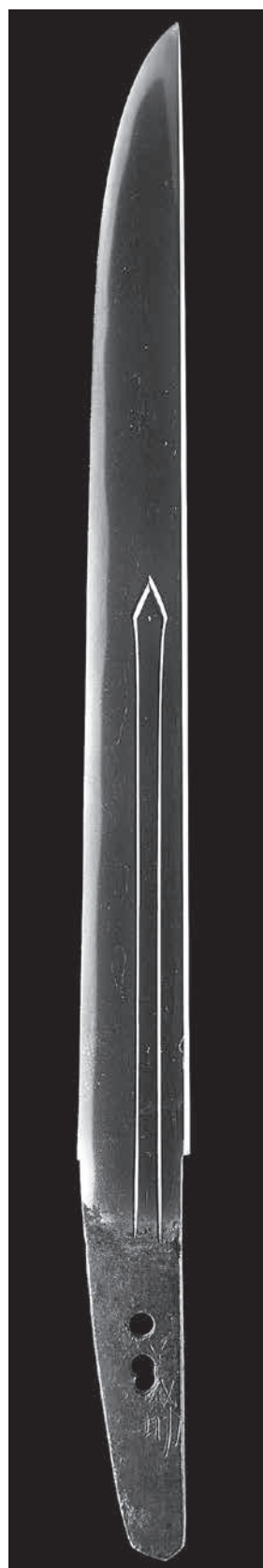
『駿遠豆三州刀工の研究』所載

桐箱付き 二八〇万円



全身を除いて原寸





黒出し鮫黒呂塗鞘合口拵 〈角所〉黒漆塗研出し 〈目貫〉葵紋三双 赤銅七々子地 容彫  
 〈小柄〉葵紋三双 赤銅七々子地 高彫 裏・磨地 〈目釘〉銅製差込式 頭に赤銅色絵（拵の総長 四一cm）



## 脇差 伊予掾源宗次

（寛永―肥前）

江戸初期 約三九〇年前

鎬造り 刃長一尺七寸六分（53・4cm）反り四分  
 元巾九分八厘 先巾七分三厘 重ね二分強

長さ・反り頃合いで、中切先が延び、鎬高く重ね厚めで手応えのある重量の脇差。地鉄、小板目つみ、地沸厚くついて細かい地景が入る強靱な鍛え。刃文、焼きの高い互ノ目に大きめの丁子が交り、沸が厚くよくつき、足さかんに入って覇気があり、明るく輝く。帽子、焼きがごく深く、先き小丸で返り長く、

焼き下げて棟焼につながる。

伊予掾宗次は肥前佐賀の刀工・源正次の子。伊予掾の受領は慶長11年で、同じ肥前の初代忠吉の武蔵大掾受領の元和10年よりも18年も古い。その初代忠吉は源正次に引き取られて鍛錬を習ったという伝説があるので、宗次と忠吉の二人は兄弟弟子というこ

●次頁に続く



●前頁から続く

となる。寛永初期の作刀が多く、乱れ刃を得意とし、沸・匂いがよくつく激しい作行である。この脇差もその一振で、よく乱れた刃文は覇氣があり、傑

作の一つである。拵は頭は角の懸け巻きになっているが、他は皆色金の出来のよいもので揃える。黒呂の鞘もツヤがあり、全体にしつかりとした良拵。

金着二重鍔（越中着せ）  
特別保存刀剣鑑定書付  
拵付（白鞘もあり）

八十五万円



全身を除いて原寸

黒呂塗鞘脇差拵

黒漆塗角（縁）

木村友長刻

鮎図

赤銅磨地

薄高彫

毛彫

金・四分一色絵

（目貫）

正光（花押）

（際端銘）

流水菊花図

素銅地

容彫

金・赤銅色絵

（鐔）

鍾馗図

赤銅磨地

丸形

片切・毛彫

角耳小肉

（小柄）

蘆刈図

赤銅七々子地

高彫

金・銀色絵

裏・磨地

（柄）白鯨着紺蛇腹糸巻

（拵の総長

七七・五cm）

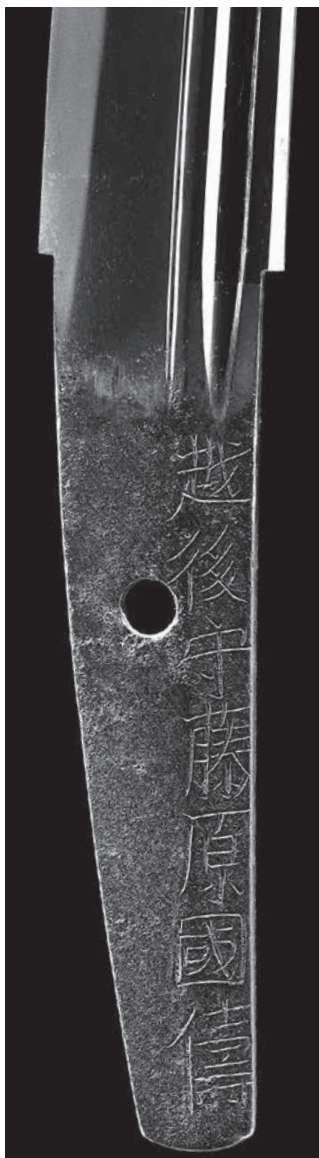


脇差 越後守藤原国傳くにとも

(元和—京都)

江戸初期 約三九五年前

鵜ノ首造り 刃長一尺三寸三分弱(40・2cm) 反り四分二厘 元巾一寸七厘 先巾九分六厘 重ね二分四厘



身巾・重ねあつて元先の巾差変わらず大切先が延び、実に力強い姿の鵜ノ首造りの脇差。上半の棟を強く削ぎ、元に薙刀樋を刻して全体にも陰影濃い。地鉄、板目がこまかく練れてつみ、地沸が厚くついて地景の入る強靱な鉄。刃文、焼き高めの太のたれ刃で、刃縁に沸がよくつき、わずかに互ノ目がかつたり細い砂流しや金筋かかり、やや沈みごころ。帽

子、そのままの浅い互ノ目で、先き棟に寄って小丸、先き掃きかける。

堀川国広門の国傳は、古伝に「生国日向飢肥おび、国広の甥、慶長頃、京に住す」とある。また同門で後輩にあたる初代国助・親国貞の直接的な指導者であったとされている。ただ年紀作は残されていない。

本作はまことに健全な一振で、鵜ノ首造りには迫力があり、刃文はのたれに互ノ目を交えて国広を見るようであり、鍛えも素晴らしい。典型・傑作の一振。

金無垢二重鑑 白鞘 特別保存刀剣鑑定書付

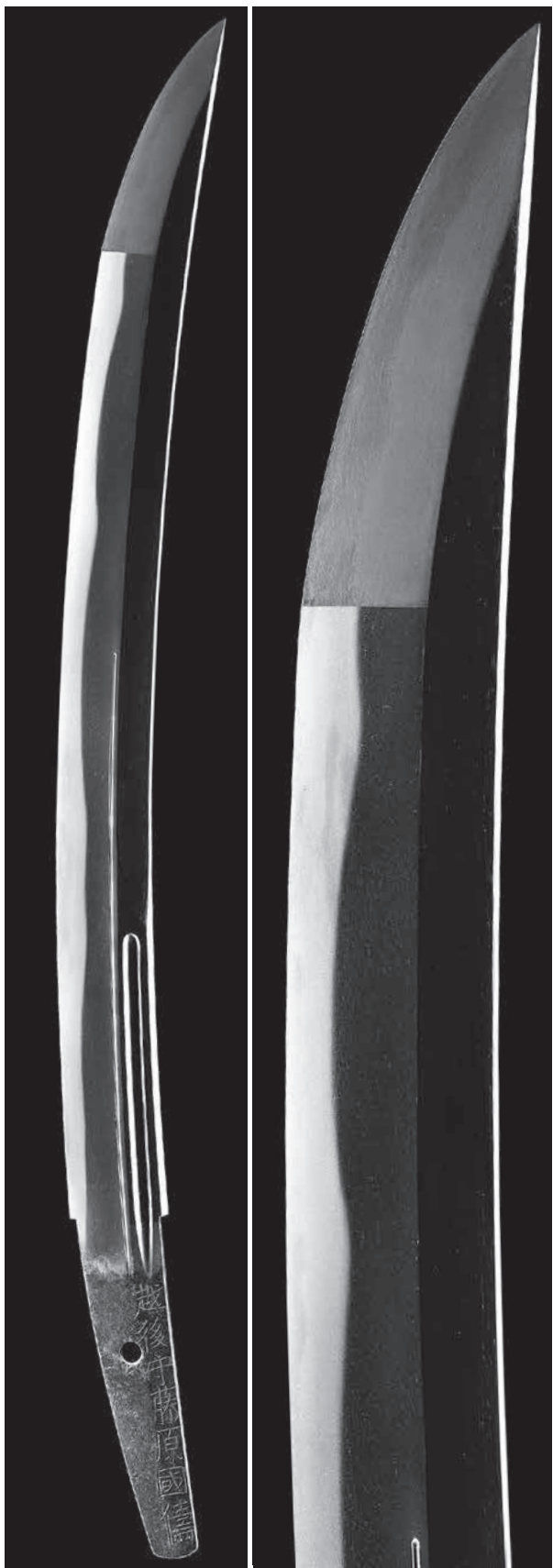
『刀剣美術』令和元年七月号「定例鑑賞会」所載

佐藤寒山博士、田野辺道宏師鞘書あり

藤代『刀工辞典』新刀編所載

二〇〇万円

全身を除いて原寸







銘拡大



### 三処物 堀江興成 おきなり 七草図

〈小柄・筭〉堀江興成（花押）行年  
六十六才 赤銅七々子地 高彫  
金・銀象嵌色絵

〈目貫〉興・成（割り際端銘）金無  
垢地 容彫

春の七草を彫った金色まばゆい三  
処物。小柄にゴギョウ・セリ・ハコ  
ベ、筭にホトケノザ・ナズナ、目貫  
にスズナ・スズシロを彫っている。  
小柄・筭は赤銅七々子地に高彫金色  
絵をし、小柄はセリの根を素銅で、  
筭はホトケノザの根を銀で象嵌して  
彩を添える。両者とも傷みのない  
厚地の金哺金を施し実に鮮やか。そ  
こに行年を加えた流暢な切銘を入れ  
ている。目貫は大きな厚手の金無垢  
地で際端に興・成と切り分ける。



若くしてこの道に入った興成は、当時の江戸の著  
名工の門（浜野政随家・大森英秀家・尾崎直政）を  
つぎつぎと叩いて研鑽にはげみ、独立して一家を成  
した。のち阿波の蜂須賀家二十五万石余に抱えられ、  
江戸在住で同家の八丁堀の藩邸内に住んでいたこと  
もあるという。もともと蜂須賀家は刀装金工を厚遇  
しており、その眼鏡にかなったということは、興  
成の評判が当時かなりのものだったことをうかがわ  
せる。長寿で75歳までの行年銘の作品が確認される。  
本作は立体感とボリュームに富む堂々たる貫禄の出  
来の三処物で、浜野・大森・後藤などの各流派を融  
合したような作柄に独自のひと味を加えており、こ  
れが興成の特徴でもある。健全で保存よく、興成の  
傑作である。

特別保存刀装具鑑定書付

上製落し箱入り

一〇〇万円

# 大小縁頭 寿岳斎石黒政美まさよし（花押）



春草図 赤銅七々子地 高彫 金・銀象嵌色絵

赤銅七々子地に的確な高彫・金色絵で、タンポポやツクシを可憐にあしらった大小縁頭。極赤で漆黒の粒のこまかい七々子地に、金色絵は性がよく、まことに目に鮮やか。フチのシトドメももちろん金無垢である。

花鳥の作品で有名な石黒派の実力者・政美の作。石黒派は石黒政常に始まり、以後幕末に到るまで多くの優工を輩出して栄えた。特に政常の高弟・政美は大活躍し、薩摩島津家の抱え工にもなり同藩の江戸藩邸に住んで仕事をした。腕のよい家系で、実子に石黒是美と明治画壇の岡本秋暉がいる。秋暉には重美に認定されている花鳥図の絵があり、それには政美の影響が強く表れている。本作は大小揃いというところがよく、また寿岳斎を冠した政美の鮮明な銘字は貴重な資料である。江戸後期。

特別保存刀装具鑑定書付  
上製落し箱入り 七〇万円

## 目貫 利政としまさ（花押）〈金短冊銘〉

秋草図 金無垢地 赤銅置金 金象嵌 容彫

朝顔と葛を金無垢地に彫った鮮やかな目貫。朝顔は今夏の八月に見る花であるが、昔の旧暦でいうと九月であり、両者とも秋の花ということになる。厚手の金無垢地に花と葉を重ねるようにタワワに彫り上げ、一部の葉は黒い赤銅の置金とし、中の葉脈は金線象嵌する。

利政には初・二代があり、初代は安永3年の水戸生まれ。金工修業のため江戸へ出て横谷英精家に学び、のち同門の先輩である桂永寿を師とする。優れ

た技量を認められ養子に迎えられて桂姓を継ぎ、また師と同じく久留米藩有馬家の抱え工となる。後年は剃髪入道して名も宗隣と改め88歳の長寿を保った。

江戸に住み、作風は水戸出身ながら水戸彫の影響は見られず、横谷風のものや、優美さが前面に出た彫技を特徴としている。二代は初代の実子で、水戸の一柳友善の分家・友善の門に入る。初代の宗隣改銘後に利政を名乗ったと思われる、江戸金工の有力者となり、のち明治の中頃まで東京に生存した。

本作は銘はキッチリと金短冊で裏に入る。見る人を喜ばせる鮮やかな出来であるが明治金工の雰囲気もあり、二代の傑作なのかもしれない。幕末。

特別保存刀装具鑑定書付  
上製落し箱入り 三十五万円





## 鐔 無銘 尾張

井桁透し図 鉄鍔目地 丸形 透し彫 角耳小肉  
両櫃孔・四分一当金

よく鍛えられた厚手の鉄で、中低に仕上げられた尾張鐔独特の造り込みに、井桁を透した重厚な鐔。尾張鐔には左右対称の図が多いとされ、そのような図柄であるが、枡の横長の四つの透し、また角々の繋ぎなど、それぞれを少しずつ変えており、気を入れた作である。厚めにとった耳や、ガッチリした透しの付け根など、同派の特徴がよく表れている。

尾張鐔は京透し・赤坂とともに三大透し鐔の一つに数えられ、重厚・謹厳であり、骨格がしっかりとしているのが特徴である。明治期の著名な愛鐔家の故・秋山久作翁は「地透し物の内、武人の目よりし



## 鐔 利春

て、尾州物に優る物、有る事なし」とまで言い切っている。本作は姿も左右同寸で、味わい深い尾張鐔の典型の一枚である。室町後期。  
◆縦七六・一mm 横七六mm 厚さ六・三mm (耳のところ)、五・四mm (切羽台のところ)

特別保存刀装具鑑定書付  
上製箱入り 五十五万円

月下芦雁図 赤銅磨地 障泥形 鋤出し高彫 金・銀・素銅象嵌色絵 鋤残し土手耳  
漆黒の赤銅磨地の耳を厚く太くとり、中をやや窪ませた落ち着いた形の鐔。表に湖畔で帰りを待ち受ける雁と、上に急くように帰来する雁を三羽。湖畔



の芦の金色絵が大きくきれい。裏に雁はおらず、天空に三日月を大きく銀色絵、雲を金色絵。下方に金の芦と素銅の石を配し、余韻を残す。

利春は奈良派の利長の門人。利長は享保ごろの人で利永の弟子。高名な利寿は利永の門人といわれるので、利長は利寿と同門ということになる。その流れを汲む利春のきれいな赤銅磨地の鐔で、奈良式の精巧で小模様な高彫色絵の工法で彩る。江戸中期の江戸における奈良派の隆盛はすさまじく、その門下に参集する者は数知れずの流行をみた。その隆盛の一端を担った工である。傷みなく保存がよい。江戸中期。

◆縦七三・一mm 横六九・五mm 厚さ四・七mm (耳のところ)、四mm (切羽台のところ)

保存刀装具鑑定書付  
上製箱入り 二〇万円





# 縁頭 無銘 勘四郎

波瀾山道図 〔縁〕 赤銅・素銅・銀芋継地 鋤出し彫

〔頭〕 四分一磨地 鋤出・鋤下彫

肥後の波瀾山の縁頭で、カシラは四分一磨地に波を鋤出・鋤下彫し、山道の線を深く刻む。フチは高さの浅い樋形で、赤銅主体に素銅を三分の一ほど、月を細く銀とし、三種を芋継ぎした磨地に波を彫り色合いよく見事。手のかかりようと風雅な画題が織りなし、何ともいわれぬ味わいを醸し出している。

肥後金工・四主流のうちのひとつ、西垣派の初代・勘四郎の優縁頭。勘四郎は慶長18年に生まれ、二代・平田彦三から彫金の技術を相伝したのち独立、細川家から扶持を得る。勘四郎の特徴は風雅である。と昔からいわれ、確かに他の三派とは異なる趣がある。この縁頭は時代もある上に、動きのある彫り口に、地金の組み合わせ手法などから、初代・西垣勘四郎の作と鑑せられた。勘四郎らしい個性が表れて、まことに優れた出来栄えを見せている。江戸前期。

保存刀装具鑑定書付

上製落し箱入り 三〇万円

## 鐔 葛飾住丙午如月吉日 (昭和41年)

真柳叟守平 (花押)

茨木童子図 四分一磨地 障泥形 薄高彫 甲鋤彫金・銀・素銅色絵 小柄櫃孔・金埋め 耳・打返し  
大きな厚手の立派な鐔で、ツヤのある四分一磨地で仕立て、耳を強く打ち返す。表に、雲に乗り何かを抱えて飛び去ろうとしている鬼を薄高彫、顔はまさに般若で赤色の素銅とする。銀の髪は乱れ迫力満点。手・足も銀とし、服は桐文の柄を金色絵。裏面は大きな屋敷。屋根の梁が崩れ、瓦が空に飛び散っている。鬼がここから飛び出したのだろう。毛彫・薄高彫を巧みに交え、各所に金・銀色絵。

『御伽草子』など各書に登場する茨木童子の名場面。大江山の酒吞童子の下、源頼光とその四天王に退治され、逃げのびるも渡辺綱に片腕を切り落とされた。その腕を綱の屋敷(鐔の裏面)に取り返しに来たというところ。守平は昭和を代表する現代金工。明治32年に東京で生まれ、初め吉岡光重に学び、のち豊川家二代光長の門人となる。独立後に守平と改名。昭和46年没。本作は41年の晩年の力作。銘部は『金工銘鑑』に所載される。なお銘の葛飾とは千葉県市川市真間(東葛飾郡真間)のこと。現代。

◆縦八八・五mm 横八四・六mm 厚さ五mm

『金工銘鑑』所載(銘部)  
上製箱入り 六〇万円



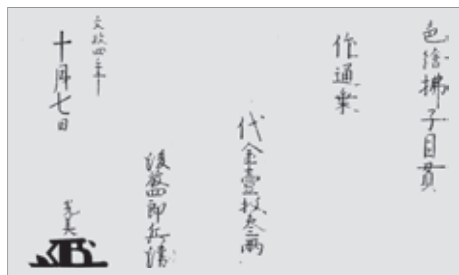
# 目貫 無銘 通乗（光美折紙極め）

松子図 赤銅地 容彫 金・銀・四分一色絵

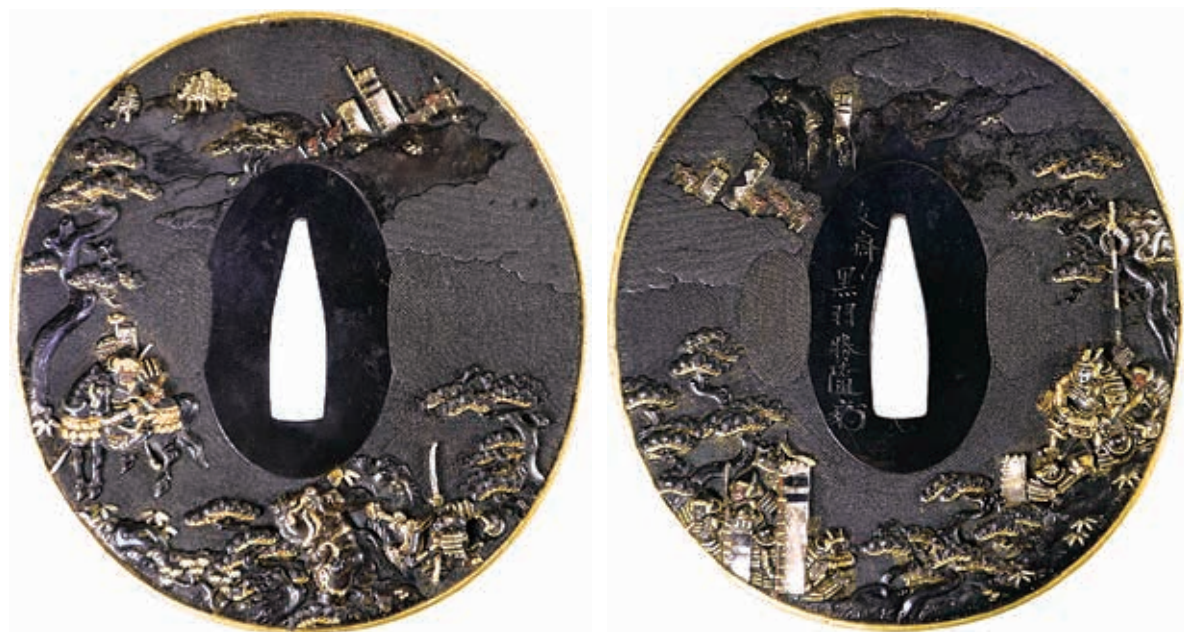
キリッと締まった厚手の赤銅地に、松子の毛の部分は四分一とし、毛に刻まれた細い彫りは流暢で見事。持ち手の柄の先の管部・輪は銀色絵、小尻部と巻きつけた房は鮮やかに金色絵。だいたい仏具とは思っているより華やかなもので、本作にもその豪華さが表されている。裏の根も高い作ったままの姿。

後藤家15代光美の極めにより、11代通乗の作と極められた繊細で美しい目貫。通乗は元禄から活躍しており、横谷宗珉など町彫金工の台頭著しい時期、江戸において家彫の格式を守りつつ時流にあわせた斬新な作品も生みだし、後藤家の作風を大きく転換させた工。そのため後藤家の下七代の最初の人に挙げられ、家彫に吹き込んだ新風の一端は今回の作からも窺える。江戸中期。

特別保存刀装具鑑定書付  
特製落し箱付き 三十五万円



後藤折紙付き（15代光美）



# 鐔 文斎 黒羽勝随（花押）

源平合戦図 赤銅七々子地 長丸形 鋤出高彫 金・銀・素銅家嵌色絵 耳・金色絵 覆輪

目の詰んだ赤銅七々子地に武将・松樹を高彫して金色絵する。軍旗は銀色絵し引両は赤銅色絵、処々のこまかいところに銀や素銅を入れる。特に松明は素銅色絵。背景の山々を磨地で鋤出彫し、霞文を場面の高低差に用いる。

鑑定証に「源平合戦図」とあり、多数の松明から夜襲の場面、木曾義仲を大将とする砺波山での奇襲戦、俱利伽羅峠の合戦図と思われる。表の大鎧の武將は朝日將軍義仲で、傍の旗印に笹竜胆の家紋を金色絵。裏面は追い詰められた武將と、馬と共に崖から転落する平家の武者を描く。勝随は岩間信随の門人で、のち養子となり岩間家三代目を継承する。作風は岩間流の高肉彫というが本作は後藤流の出来で、表裏ともに合戦図をこまかく描き、表裏の武將は高く彫られて見事。性のよい赤銅地で重量あつて金覆輪が全体を締め、豪華さを出している。江戸後期。

◆縦八一・八mm 横七六mm 厚さ五・一mm  
特別保存刀装具鑑定書付  
上製箱入り 七十五万円



筭 無銘 京金工



鑑定書で「京金工」に極められた作を三点。京金工とは有名流派に属さない江戸後期の京都の金工たちの総称であるが、場所柄、後藤の流儀をとり入れ、金を多くあしらった作が多い。

今回の三点も後代の後藤の作と見てよいような作柄で、以前は脇後藤とかの極めになったものであろうが、今は新しい極め言葉の「京金工」と統一しているようである。特に江戸後期と見られる作はその傾向が強いようである。逆にその点からも、あまり使われておらず、きれいで傷みない作が多いともいえるようである。



目貫 無銘 京金工

獅子図 金無垢地 容彫 陰陽根

大ぶりの雌雄獅子の金無垢目貫。裏からのへし出しもよく効き高さがあり、金色よくツヤがある。二頭とも前肢は前方に突き出し、後肢は力強く土を蹴る。たてがみや尾をふさふさと毛彫し、身体に毬模様を浅く線刻する。裏の根は陰陽根がきちんと残る。

金無垢目貫のよさは、手にしたときの金というもののきれいさと満足感にある。今般、金の価格は高騰したままで金無垢目貫の価格も上昇気味である。金無垢目貫の図柄はさまざまあるが、今回の獅子図のものは人気の点で龍図と並ぶ。

保存刀装具鑑定書付

上製落し箱入り 二〇万円

這龍図 赤銅七々子地 金紋 金哺金

赤銅七々子地に傷みなく、裏の哺金も傷みなく、筭は先までピンとしている。赤銅七々子地に乗る金紋の這龍は、小柄の方が大ぶり、それだけに龍の造作、鱗などすべてが少し大粒になる。姿態は両方とも手慣れており、よくまとまっていて見栄えがよい。龍の二処として鞘の小柄・筭櫃に入れる分には揃い物で十分通用する。

保存刀装具鑑定書付

上製落し箱入り 十万円



這龍図 赤銅七々子地 金紋 金哺金

保存刀装具鑑定書付

上製落し箱入り

16万円

小柄 無銘 京金工



# 刀 肥前国住人忠吉作<sup>ただよし</sup>

(元和—肥前)

江戸初期 約四〇〇年前

鑄造り 刃長二尺二寸八分半 (69・1cm) 反り六分弱 元巾九分八厘 先巾七分六厘 重ね二分一厘 定寸に身巾・反り・重ね頃合いで中切先が延び、表裏に棒樋を彫り、加えて表に爪付剣、裏に梵字・

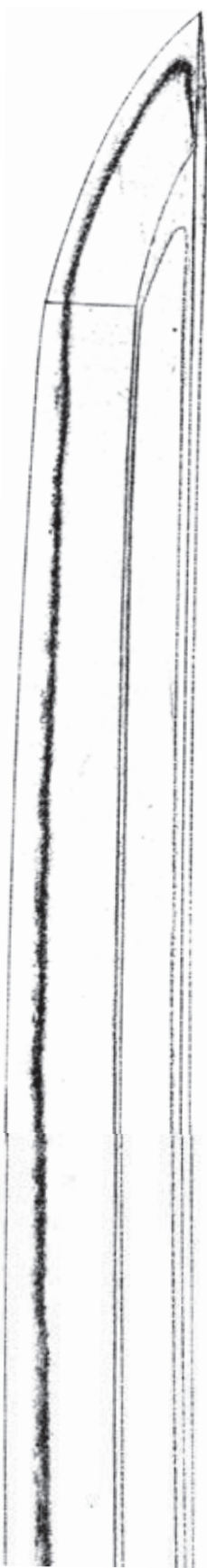
絹索を刻してまことに見栄えがよい。地鉄、板目よく鍛えてつみ、肌目がきれいに現れ、地沸よくついて地景入る。刃文、小沸づいた穏やかな直刃仕立て。沸・匂い深く、特に刃縁は明るく冴える。帽子、直ぐ調に先き失りところに小丸、わずかに掃きかける。人気高い肥前・初代忠吉の「住人忠吉」銘の刀である。忠吉は初め肥前国忠吉と五字銘に切り、次に住人忠吉銘を併用するようになるが、一般に住人銘は

元和ころに多い。晩年は武蔵大掾忠広と銘する。住人銘時代は直ぐ調やのたれの刃文が多く、本作もその一つである。また表裏に加えた彫物がよく美形の一振となっている。拵は肥後拵で、鞘を細かい黒線塗にしていてきれいで洒落ている。

金着二重鰭 拵付(白鞘もあり)

特別保存刀剣鑑定書付

三二〇万円



全身を除いて原寸



### 黒呂千段塗鞘打刀拵

〔頭〕行合浪図 赤銅地 鋤出彫 〔縁〕雨龍図 鉄地 鋤出彫

〔目貫〕樋定木に揚羽蝶図 赤銅地 金七々子地丸形に高彫 金色絵 〔鐔〕神吉と銘あり 蘭透し図 鉄磨地 六ツ木瓜形 透し彫 毛彫  
〔小尻〕湖畔図 鉄地 金布目象嵌 〔柄〕白鮫着茶燻革巻 拵の総長 九七cm



### 脇差

### 於南紀文珠金助重国造之

〔万治―紀伊〕

江戸前期 約三五〇年前

鑄造り 刃長一尺五寸六分強（47・4cm）反り四分  
元巾九分八厘 先巾七分 重ね二分五厘

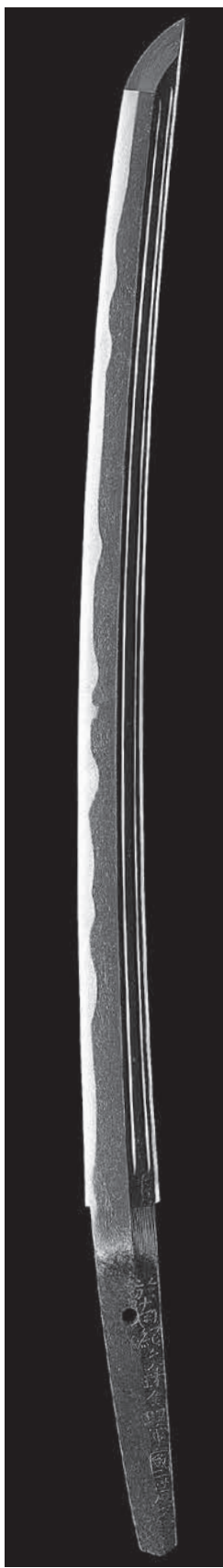
長さ・反り頃合い、身巾尋常ながら重ねが厚く、堅実な姿で手重りがあり、表裏に二筋樋を刻する。地鉄、板目流れて奎が交り、肌目が立ってよく現れ、地沸がつく。刃文、のたれ調に浅い互ノ目を交え、沸よくついて匂い深く、足入り、砂流し・沸筋かかる。帽子、焼き深く直ぐでさかんに掃きかけて返る。

二代目重国の作で、初め金助、後に四郎兵衛と称する。銘文のほとんどに文珠と入れることから、世に「文珠重国」と呼んで初代と区別している。明暦から万治・寛文の作品を見、重刀にも数振指定されている。父・初代の跡を継ぎ、紀州藩の抱え工となり、徳川頼宣の鍛刀のお相手を行ったとも伝えている。本作は地鉄の鍛れ具合がよく、健全で上出来の一振で、銘に金助ときちんと入る作は珍しい。拵も雲文塗の鞘に、金具は上作のもので揃え、内外ともに見栄えのするものである。

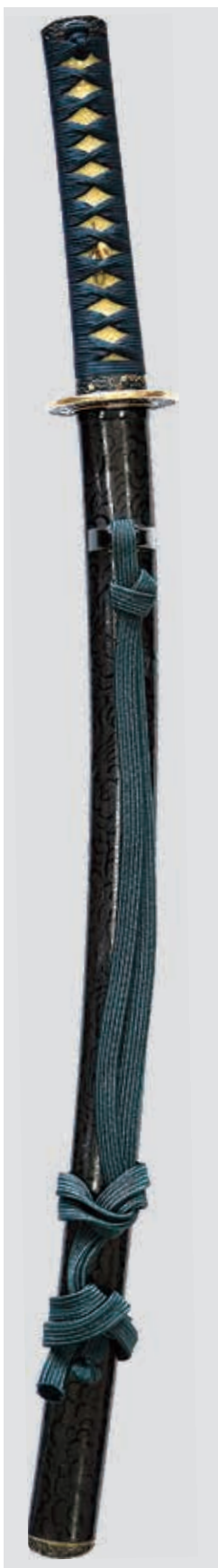
金着一重鐙 拵付（白鞘もあり）  
保存刀剣鑑定書付 七十五万円

●次頁に続く





黒石目塗雲文散し鞘脇差拵 〈縁頭〉 葛図 赤銅細石目地 甲鋤彫 高彫 金・素銅色絵 〈目貫〉 瓢箪図 素銅地 容彫 金色絵  
 〈鐔〉 波龍図 赤銅地 鋤出彫 丸形 耳・縄目金覆輪 〈小尻〉 菊花図 四分一磨地 鋤出彫 金小縁 〈柄〉 白蛟着緑糸巻 (拵の総長 八〇cm) 全身を除いて原寸



## 刀 日置光平造

(正保—江戸)

江戸前期 約三七五年前

鑄造り 刃長二尺四寸強 (72・8cm) 反り三分八厘  
 元巾一寸六厘 先巾七分二厘 重ね二分四厘

長寸に身巾あって反り浅く、先巾はそれほど狭まらず、重ねあつてまことにしっかりとした新刀姿。地鉄、板目に小板目が交じつてよく鍊れ、地

沸がついて焼き頭から淡い映りが立つ。鑄地は柁がかかる。刃文、焼きの高い丁子乱れ、焼きが鑄筋にかかるまで上がる豊かな乱れで、足・葉さかんに入り、砂流しかかり、小沸よくつき美しい。帽子、焼き深く、互ノ目がかり、先き小丸。

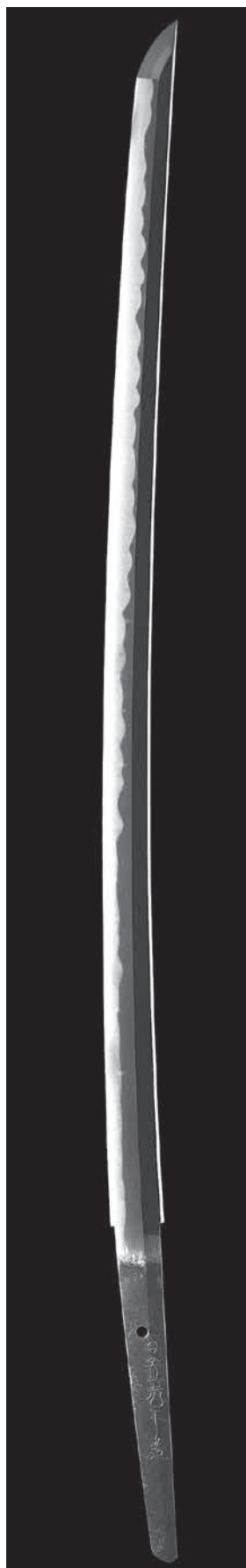
光平は江戸石堂派の盟主である。出身は江州蒲生郡。日置山城守一法の長男で、常光・宗弘・是一らと江戸へやって来て江戸石堂の一群を形成した。本作は光平の初期にあたり、銘は特別重要に指定され

ている正保三年紀の刀の銘とまったく同じである。ただ特重の刀には金象嵌断銘がベタベタとあつた。しかし本作も他に紛れぬ光平の傑作といえる。光平のその後の活躍は周知の通りで、出羽守を受領し、のち入道して泰信と称し法橋に叙せられた。丁子華やかな本作は光平の力量を余す所なく示している。

金着二重鑑 白鞘

特別保存刀剣鑑定書付 二八〇万円





# 刀 肥前国住人広則ひろのり

(寛永—肥前)

江戸初期 約三九〇年前

鑄造り 刃長二尺三寸五分(71・5cm)反り六分五厘  
元巾九分四厘 先巾六分七厘 重ね二分一厘

定寸の長さに反り浅く、スラリとして重ねは頃合  
い、まことに美形の一振。地鉄、小板目がよく錬れ  
てつみ、地沸よくついて肥前の小糠肌と称するもの  
になる。刃文、焼きの高い小沸が深々とした互ノ  
目に丁子を交えてまことに華やか、匂い口冴え、刃  
中足が刃先に抜けるほどに長く入り、金筋入って砂

流しきかんにかかり、実に明るく冴える。帽子、浅  
く乱れ込み、先き小丸に返る。

肥前の広則は銘鑑によると「肥前国住人、慶長」  
とあり、初代忠吉の門人とされ、今回の重刀証書も  
それを踏襲するが、その後研究が進み、現在では播  
磨大掾忠国の初銘であることが明かになった。これ  
だけの優作を造りながら作品が少ないことも、忠国  
の初銘とすれば全て氷解するわけである。

忠国は初代広貞(吉家)の次男として慶長3年に生  
まれた。初銘の広則から、寛永11年37歳で播磨大掾  
を受領し忠国と改銘した。脇肥前の優工で、たいへ  
んな長命で元禄四年の没という。今回の作は広則銘

の優品で資料的にも価値高い。有名工の作とは知ら  
れず、出来映えだけで早い機会に重要刀剣に指定さ  
れたというのも貴重なことである。拵は赤銅地に稲  
穂に雀図で揃えた豪華なもの。小柄だけ富岳図に入  
れ替っているのは残念だが、金具は傷みなく、また  
鞘も傷みなく、柄前は白糸を蛇腹巻きして、全体に  
キッチリ力強く揃ったものである。

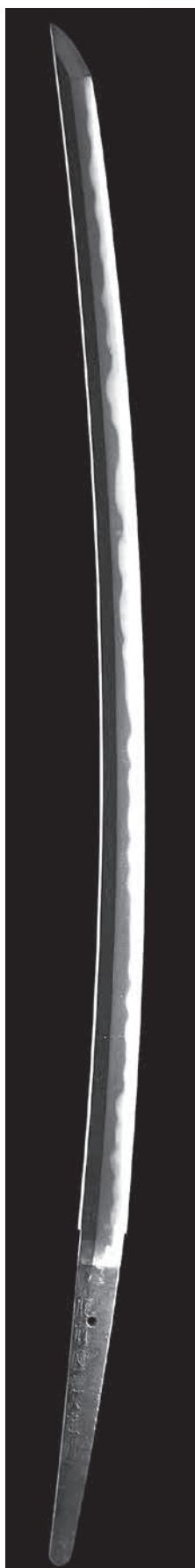
金着二重鰭 拵付(白鞘もあり)

重要刀剣(昭和40年・第13回)

静岡県指定有形文化財

佐藤寒山博士鞘書あり

四五〇万円



全身を除いて原寸

黒呂塗鞘打刀拵（縁頭）稲穂に雀図 赤銅七々子地 高彫 金色絵（目貫）同図 赤銅地 容彫 金色絵（鐔）同図 赤銅石目地 長丸形 高彫 金色絵  
 〈拵〉同図 赤銅七々子地 高彫 金色絵 裏・磨地 〈小柄〉富岳図 赤銅磨地 高彫 裏・哺金 〈柄〉白鮫着白色蛇腹糸巻（拵の総長 九八cm）

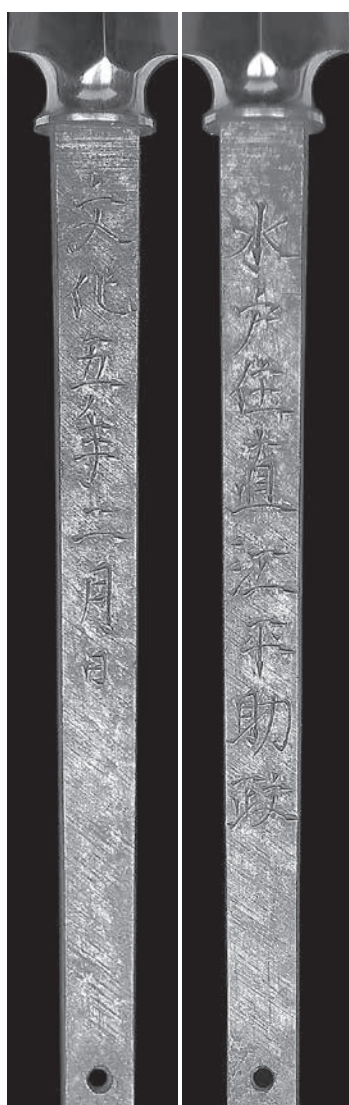


## 槍

水戸住直江平助政  
 文化五年二月日

（江戸後期―水戸） 二二三年前

両鎧造り 長さ六寸一分（18・4cm）元巾七分八厘  
 先巾七分七厘 重ね三分三厘（中ほど）総長60.3cm



頃合いの長さの両鎧造りの直槍で、元と先を張らせて中途の巾を狭め、重ね厚く、コリツとした力強さがある。地鉄、小板目がよくつみ、地沸が厚くつき、こまかい地景が入る。刃文、直ぐ調に小互ノ目が交じり、沸厚くつき、小足がよく入り、長い砂流しかかり、金筋も入る。帽子、両側から直ぐに上つ

て先き丸、わずかに掃きかける。

近世後期以降、水戸藩工の頭領的地位にあった直江家の初代ともいべき助政は、市毛徳鄰とともに水戸刀を代表する名工である。大坂の尾崎助隆門であるが、小板目よくつんだ地肌、沸・匂いの深い直ぐ調のたれ刃を焼くことから見て、大坂新刀の井上真改を目標としていたものと考えられる。本作は助政にあっては珍しい槍の作で、文化五年の年紀が入り、銘の壺枕はまだピンビンと立っているほどの健全さである。作域も、つんだ地鉄に働きのある沸出来の刃文を焼き、刀の優作を見ようである。助政の優品の一つとしてお薦めする。

特別保存刀剣鑑定書付

白鞘 七〇万円

中心・刃文原寸

● 次頁に続く







# 刀 水府住関内徳宗<sup>のむね</sup>於白旗山下作

安政四年二月日

(幕末—水戸) 一六四年前

鑄造り 刃長二尺五寸三分強(76・7cm) 反り八分五厘 元巾一寸六厘 先巾七分四厘 重ね二分四厘 長寸で身巾広く重ね厚く、中切先延びて反りこく深くついた力強い姿で、手にあまる重量がある。地鉄、板目に流れごころ交り、刃寄りには特に柃がかり、

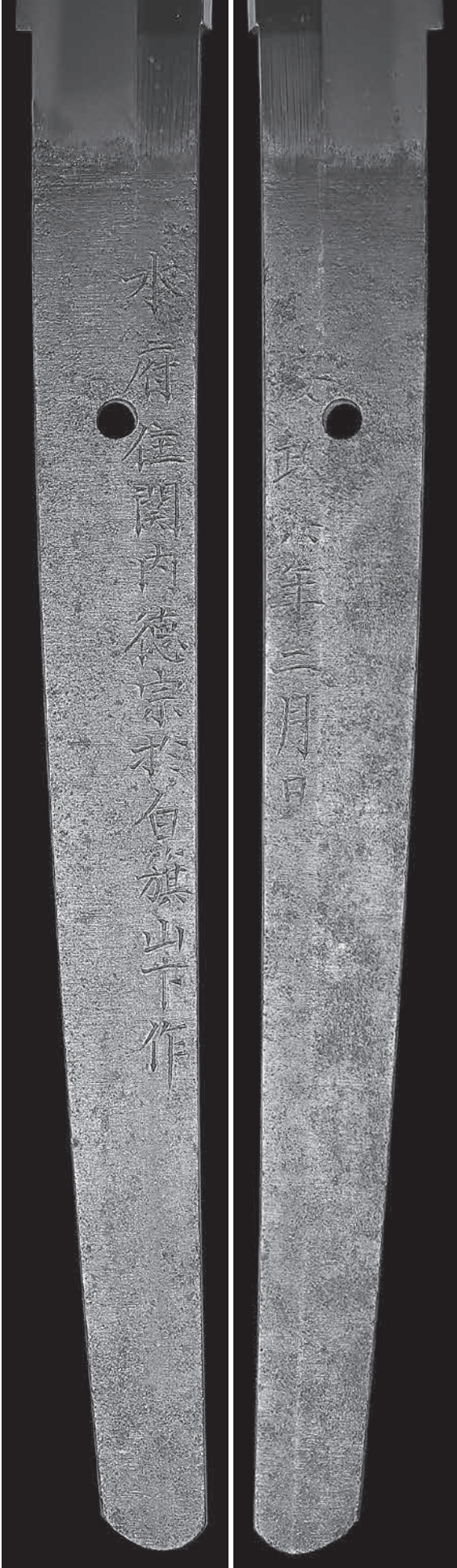
地沸ついて乱れ映りが全面に淡く立つ。刃文、丁子乱れで、高低をつけて尖り風の刃も交じって華やかに乱れ、沸・匂い深くつき、足よく入り、葉飛び、こまかな砂流しが長く盛んにかかる。帽子、乱れ込んで先き掃きかけ、尖り調に返る。

徳宗は幕末に盛んに活躍した水戸刀工の一人である。市毛徳鄰の弟子と伝え、のちに多くの門弟を養成し、初代・勝村徳勝もその門下であった。子に徳兼があり、共に水戸藩の白旗山武器製作所で鍛刀し

ていて本作もその一振である。徳宗の作風は丁子刃を焼く純然たる備前伝一筋で、映りを淡く出す古作一文字伝をねらって技術的にも優れている。本作はその代表作ともいえ、長さのある豪快な姿は素晴らしい。拵は鉄の勝虫(トンボ)金具で揃え、鞘は黒塗に青貝微塵を散らす。当時製作の共拵でガツシリしたもの。勝虫に願いを込めたことがよく分かる。

金着二重苔鏝 拵付(白鞘もあり)

特別保存刀剣鑑定書付 一八〇万円



黒漆青貝微塵塗込め鞘打刀拵（縁頭）流水勝虫図 鉄磨地 赤銅据文 金色絵（目貫）勝虫図 赤銅地 容彫 金色絵（鐔）勝虫に蜘蛛図  
鉄阿弥陀鑑地 長丸形 真鍮据文 鉄高彫 金点象嵌 耳・打返し（袋小尻）無文 鉄荒し地 金小縁（柄）白鯨着黒糸巻（拵の総長 一一・一 cm）



## 刀 依正興好 水府住徳勝作之

慶応三年二月日（幕末 水戸）一五四年前

鑄造り 刃長二尺六寸四分（80 cm）反り七分半 元  
巾一寸八厘 先巾七分二厘 重ね二分八厘

二尺六寸超えの勤王刀と呼ばれる豪刀で、身巾やや広めに重ね厚く、中心も実に長い。切先は中切先で、鑄高く棟を卸して重量十分であるが、反り深くついて武骨さの中にも美しさがある。地鉄、柃目肌錬れてつみ、やや肌立ち、地沸厚くついて地景入る。

刃文、小沸づいた中直刃仕立てに互ノ目足を交え、刃中に砂流し長くかかり、金筋やほつれがさかんに働く。帽子、直ぐに先き小丸。

勝村徳勝は文化六年水戸の生まれ。はじめ水戸藩工の関内徳宗（前頁に掲載）に学び水戸藩の刀匠となった。嘉永五年、藩命により江戸に出て、細川正義・固山宗次・運寿は一らに教えをうける。文久年間に江戸小石川の水戸藩邸に移り作刀する。初期はともかく中期以降の作品は全て大和伝柃鍛えて、実戦向きの頑丈な刀を大量に造りまくった。一般に

「水戸刀」というと、実戦向きの頑丈な刀を思いうかべるが、その代表がこの徳勝である。数も多く、たくさん水戸藩士が共にしたものであろう。中で本作は為銘の入る注文刀。大変長く、その腕力が偲ばれる。また出来もよく、佐藤寒山博士の昭和26年の鞘書があり「同作中傑出之一」と記されている。

金着一重鑑 白鞘

特別貴重刀剣認定書付（昭和26年）

佐藤寒山博士鞘書あり（昭和26年11月）

特別保存刀剣鑑定書付

二二〇万円



●前頁・徳勝の刃文・中心・全身



依心興好  
水府住徳勝作之

慶應二年二月日



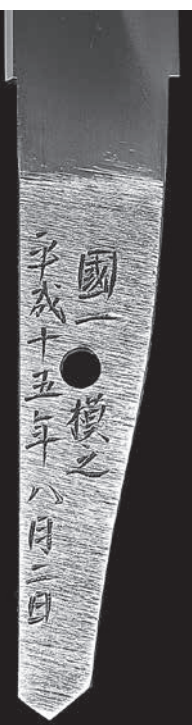
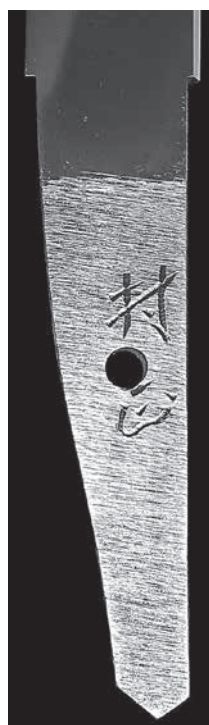
全身を除いて原寸





黒呂鞘 籐巻柄短刀合口拵  
 〈目貫〉 瓢箪図 金地 容彫 〈角所〉 黒漆塗研出し (拵の総長 三八・五 cm)

全身を除いて原寸



## 短刀

国一模之<sup>くにいち</sup>

平成十五年八月二日

村正

(現代—兵庫県) 八年前

平造り 刃長七寸五分半(22・8 cm) 反りなし  
 元巾七分五厘 先巾五分三厘 重ね一分八厘  
 長さほどよく、身巾・重ね頃合いのスッキリした姿。地鉄、板目がわずかに肌立ち、刃寄り柂流れ、地沸がこまかによくつく。刃文、小沸づいた大互ノ目を連らねて表裏が揃い、谷に沸づき、肌からんでほつれ・砂流しか

かる。帽子、直ぐに小丸、裏は特に掃きかけ、長めに返る。

作者の高見太郎国一師は、現在大活躍の河内国平師(奈良県)が最初にとられたお弟子である。ちなみに国平師の弟子はこれ以降、名前に二郎・三郎など数字を入れることになっており判りやすい。国一師は昭和48年4月生、兵庫県佐用郡上月町出身。平成4年3月、高校卒業と同時に国平師入門。同11年独立して、故郷の上月町に鍛刀場を設立する。新作名刀展で特賞を何度もとり、令和元年には無鑑査の指定を受けた。本作は、銘にある通り村正写しの短刀。戦国時代、村正が作られたばかりの時はこんな\*

\*風だったのだろうなと思わせる一振である。拵は古いもので黒鞘に当たり等あるが籐巻柄の味深いもの。もしかしたら、この拵に合わせるための注文短刀なのかもしれない。

金着二重鍔 拵付(白鞘もあり)  
 三十五万円



# 鐔 無銘 草薙派くさかり

雲龍図 赤銅磨地 木瓜形 鋤下彫 金平象嵌 毛彫 耳・鋤残し土手耳

漆黒の厚手の赤銅磨地に、耳と切羽台を鋤残して木瓜形に象り、鐔の表裏に雲龍図を描く。龍は大きめに金平象嵌し、体の細部に毛彫を加える。雲は金平象嵌と金線象嵌の二種で描く。

無銘ではあるが仙台の草薙派の作に極められたきれいな鐔。草薙派は清定に代表される伊達藩の抱え工で、同地の渋谷派と共に金・銀平象嵌の技法を得意とした。本作は祥瑞の象徴とされる龍と雲を鮮やかに金象嵌し、赤銅の黒地とのコントラストが華やかな鐔である。江戸後期。

◆縦六八・四mm 横六三・六mm 厚さ五・二mm

保存刀装具鑑定書付

上製箱入り 十八万円



# 鐔 無銘 京透し

四方破れ扇透し図 鉄地 丸形 透し彫 角耳小肉 鍛え良好な鉄地に、鐔面を四本の線で分割して破れ扇を対角に透す。扇の地紙の破れは、規則正しくデザイン的である。扇は縁起物として贈答したり、風をおこして神が宿るとされ、お守りにもなった。破れ扇図はよくあるが、一説に扇の地紙は破れても肝心な要は壊れないということ、不屈の精神に結びつけて貰んだそう。また壊れ物に哀愁や無常を感じる日本人の気質もあるようだ。鑑定書で京透しに極まる落ち着いた中にも華のある鐔。室町後期。

◆縦八三mm 横八三・一mm 厚さ四・七mm

保存刀装具鑑定書付

上製箱入り 十二万五千円



## 日本刀「現存の優品」⑨

令和3年7月1日 発行  
発行人 柴田光隆  
印刷所 株式会社ライトラボ

本誌『日本刀 現存の優品』は、刀剣柴田が正月と7月に行う刀剣即売会の売品カタログです。以前、当社から発行されていた月刊誌『麗』購読者の皆様を中心にお送りさせていただきました。無料でお送りいたしましたが、不要な方はご連絡ください。次からは見合わせますので。どうぞよろしくお願いいたします。

銀座・刀剣柴田

〒104-0061 東京都中央区銀座5-6-8  
ホームページ: <http://www.tokensibata.co.jp>

☎ 03(3573)2801  
FAX 03(3573)2804